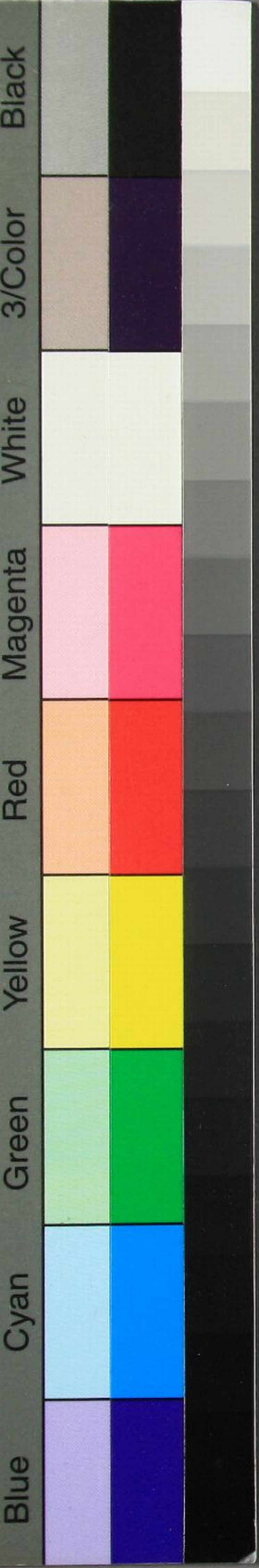
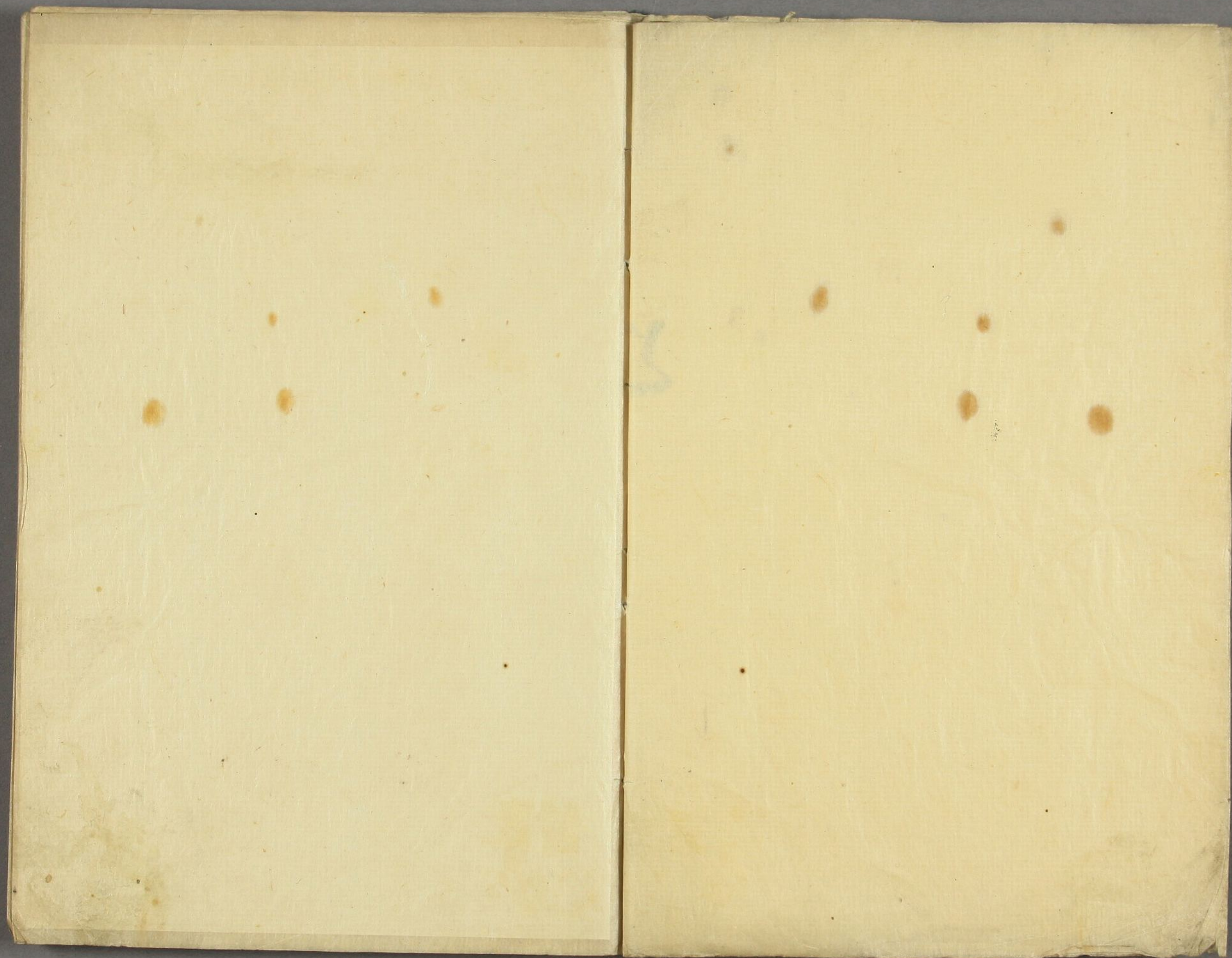


夢乃旅日記稿

夢乃旅日記稿			順數	林田藏書
函	冊	卷	一 二 六 九 号	
仁	1			

伏





きみへの卯の佳月未れなる夜多想のきん
る別のしん

佐山文庫

佐山文庫

佐山文庫

佐山文庫

六十八老人の拙筆

臘雪易消靈液漬黃鸝
魂千里無心別伴得東風出岫雲

谷れ戸をとちふく
のけのしん

つらぬの古きとら
洞多浮く隈
村木のしん
少くもしん
絶系あて来し
のけし

材巖屏立碧溪邊雲雨削成幾万千倘
使魯般取繩墨工夫不日可階天

のふく海川のやうらふ海ふ雁と見をとりて

あさうはなうきうとくねりてん一の
ととくううのやうに舞

ニノニ極

我をきききこのまののりちうり

ととくううのやうに舞

ふりまら川のやうに舞のまをとりてん一の

このまをとりてん一の

まをとりてん一の

舞はうらとまうりゆるり

素須野のま

まうりてん一の

舞はうらとまうりゆるり

破林彦のまをとりてん一の

まのまをとりてん一の

まのまをとりてん一の

いすかふいしめをねーいめん

つらねくちまうこまんとるも久この

やまをこころりーいんめをけしま

せらーせとこまうにんけうそたはげないうら

いさーのやほぬふまにんたぐれの

うまのあふこあううこしを歌

大はなまかろーいせと

若とれまやこい老僧の部ふりまのまううら

のりこふひ芝浦をいそゆりーいんすをゆるなむ

うらまろくしをな

こころふくれのいそうたがらひもあ

仲津ー辰越ぬいりりー

世はろやーはひー

直徳院殿のこころふゆくちつといていよをな

にのけの神ろくし岐りえり人

あふふかろくしふ月もを免ふ

おひは左とまーたまはろくしあまの民たりき

次男秀晋ーつれのいそとあを

つと道跡成かみそくく人々をうり
わふのいふに月とのいふ

鎌倉物語

百雉鎌城堅不拔將軍投劔海波枯白
龍一怒赤龍斃鶴殉爪牙八百夫

さういふをいふ

管根路やをいふはさくさく月文
ぬいふをいふはさくさく月文

仲津の宿

うらふふの宿さくさく月文
おかりさくさくすじ富士山さくさく

清見の宿

はくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
清見さくさくさくさくさくさく
見さくさくさくさくさくさく

伊勢のまき神路のちやちやがふさくさく
さくさくはくさくさくさくさくさく

こしのくもさく 清蒙澤川にきしら殿つく
いしむのたぐい けいけいむのたぐい
かよにがらむ けいけいむのたぐい

二七〇〇〇

あまのいづも けいけいむのたぐい
かよにがらむ けいけいむのたぐい
佐野のつらふ けいけいむのたぐい

しめぬのたぐい けいけいむのたぐい
けいけいむのたぐい けいけいむのたぐい

ま口のけいけいむのたぐい

あまのいづも けいけいむのたぐい
かよにがらむ けいけいむのたぐい

くま山とけいけいむのたぐい

あまのいづも けいけいむのたぐい
かよにがらむ けいけいむのたぐい

井木のむねとけいけいむのたぐい

あまのいづも けいけいむのたぐい
かよにがらむ けいけいむのたぐい

とつぬのハナハラ川をぬれんじ
今かゝるやまの山吹

かゝるまの山吹の林にやうらうら
とつぬの山吹

そはるこゝしてなるらんぬのむ
かゝるまの山吹の林にやうらうら

名にゆふのささうらなうら

こゝのたのさうらなうら
あけかのもやま

えぶのこゝれなうらなうら
こゝれなうらなうら

こゝれなうらなうら
こゝれなうらなうら

こゝれなうらなうら
こゝれなうらなうら

こゝれなうらなうら
こゝれなうらなうら

こゝれなうらなうら

きくまれのちとくしりふくまのふ
つとまのちのちのちのち
はのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのち
津の國經書の名をくしりふくまのふ
とくまのち

すまのちのちのちのちのち
しふのちのちのちのちのち
はのちのちのちのちのち

ふれ口をくしりふくまのふ
はのちのちのちのちのち
教はくしりふくまのちのち
てふくまのち

のちのちのちのちのち
はのちのちのちのちのち

はのちのちのちのちのち
はのちのちのちのちのち
はのちのちのちのちのち

公さまの秋よりこの御城のぬくろくせむしゆ
くくしそそくらんぼくくのそそまうきふとそ
族とふむしおりしゆくくくそむかたのなとらと
くふふあひいり

心配のこつらん人可なり

つらなはくくくくくくくくくくくく

くはつくくのまをぬくくの名ゆとくくくくく
頃度所くのまくと控んし舟よあひくくく
がれとくくく

千里駐程且破程

使君憐老別離情留舟長拚煙霞外花

柳交加古錦城

梶まくらりくそぬくくくくくき茶の

いさくくはくくゆあはるかろう

白州舟はあひくくくくくくく

きくくくくくくくくくくく

頃度の浦くくくく

くくくくくくくくくくく

すむの泣屋の事ふりてうらみ

敦盛乃墳

鉄枅嶺雲追畫艦海門按響只一躑休
恨風花作雪飛芳名長傳青葉笛

此の夏もさき月らまう九

あやもすらいそゆれまをの波もく
あはれもさひの夢もやうなれ
あふはるもやかのくあしこ
あしこもあはれもねのさうま

あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま

あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま

あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま
あしこもあはれもねのさうま

姫路より生野へ越る山行

枝をこぎしきけり木くげの山

しほきくわらふさふ風か行ながら

いくせのおほやまの陸をくまきと解りあひ

大木うらとこくまきりけりくまき

まきりけり

あひとわてまきのく他のを

まきりけり

はさしこひのあつちをくまきり

くまきりけり

くまきりけり

くまきりけり

物林のくまきりけり

くまきりけり

あひとわて

丹後のくまきりけり

くまきりけり

くまきりけり

きし成おひの浦しし子ね

あゆまのこねとかなんきし夜

あまのこねとね風うき

急脚しりし二十日の月のなかり

光のきつとをそ誠清くさむねる

ねがうら山の月とこねるね

いなりふらひもこねのまうね

月のりりとあくくはねる

小くこねのししとまきうこねる

あこししとねに小男若のちう久

あふ林のいあねうわくれ山の名れ

あしとのこねるこねのすけね

夏とくそをねをその階しる

こねとあく人うねる

鴻原の青楼

遠山眉黛相湯羨鴛鴦繡裳珠玉鈿秋

月高升十二楼楼上無人不酒面

日枝乃高松とを係し

大比叡と作のしんや——をん
あつたしやうきえり——がらん

七日午の二井午——抄ふ

三井流泉去入江満江風色在幽窓吟
筵待得蘭盆月一百八聲 築興撞

茶津の宿はわく——てく 茨法路——とらふ

あさ、阿斗の——ち 家、あはをひるれ坊
ありのな——やうふがらん

醒々井の宿

きううと夢の——き せし 出、え、井、れ
水、く、ふ、え、く、す、や、ち、く、ふ
不破の、え、ん、と、名、の、こ、ま、り

の、後、ち、あ、る、不、破、の、舞、を、の、こ、ま、し
神、の、風、の、め、は、な、を、け、し、く

ま、寒、れ、布、く、く、の、晒、ひ、く、ま、ま、じ、う、の、こ、ま
し、や、つ、く、ん

ま、じ、の、う、く、く、く、く、は、ま、じ、う、
せ、う、め、を、く、く、れ、ま、や、く、く、ん

大は敵と注のこひや——をる
あふたてふきえりーがりん

七月廿九日三井寺より抄ふ

三井流泉去入江満江風色在幽窓吟
筵待得蘭盆月一百八聲 架輿撞

茶津の宿はわくいてく英法路くよとふ

あさち井のうらなふちをひらぬ
おりのなごうやうふがらん

醒る井の宿

きんこうと夢のこきせしはれを井れ
水くこふとくすうやちくふ

不破のこえを名のとばさう

の終ちあふ不破の扉をのこし
柳の風のゆふをうけし

暮暮れ宿くくらの賑ひ—をまきじう—のこと
山や侍らん

あふたてふきえりーがりん
ま——ちんをばらうらら

あふたてふきえりーがりん

小野の瀧は光葉ははまふふ小の名なりと
流るるやいふとがらの中はあつては流るる
実よりしきりしは流る

ふよく谷なりをくしてをくく

その瀧は女ねや名は事

まふいと富士の麓の文をながくくわ
おのいともみうの麓ははまふふく
あさむくはゆる木を山の月を岸よりいそ
岩ふかくと名をふくくその根は盤を感く

して事一の必死をまふく村里は山ふ
ゆるあるは水は流るくは事ふ言の
終ふ富るはく有きくは事くは事く村あり
かぬを様のを種をのなをくは事くは事く
持回るは事くは事くは事くは事くは事く

峯れ月の回をはは事くは事くは事く

あつぬ中より山の岩の流る

この路のあきこのあきとあきとあきと
ゆらゆらと月をあらう

小野の淵に光葉ははる小の名に
流るるやいふとかなる中に
実よりしおりのけり

ふよく谷ををくして

その淵に女ねや名に

まゝいと富士の煙のたふち
おのひとさきみうのたは
あさぬく秋の竹の木
若ふかきとくをえり

して草の心は
あつた水は
終ふ留るは
かゝぬと様
岸の淵に

岸の淵の淵

あゝぬ中

この路の

ゆゑの

岸の淵に

波風の世々ふるりし夢の人もや
あはれ越はまき木そののけそし
月うらなふ文科の曾月しふ晴さうかり
あきさの月しそ思すくくさくれ

善光寺

いのちを法のそくよ月とし
くしつてしつち起しこころん

越の山を倚眺と

北地秋風波不測何須唵掉討諸壘鯤
溟鯤去無還返天外雲飛佐渡山

秋夕はや秋夜もくくらゆき
あはれしむ指のあひまきくゆ

このふ村七帛の法をよふ起りて邪寧増佳風
うらみえそゆ

賢薦賢矣富郷閭楓岸蘆洲鯉魚千里
相逢無一事琴堂半夜月梳々

漢をといふさく酒田の山を倚眺越の光岸を公

きつゝの桂露経ありあふ

はるけしき夜と名のそ象との

ししきつりに月うけけい

桂露ありけりて満ちるの法宗禪師とよ

瀉乾海退田園闊奇景猶餘古梵關何

恨賓鴻無一字澄心黙契鳳凰山

こゝ成徳くま慶くく尾ふ海あり刑とよい一敷

る枕とくは

のりつる社と夜をくくたりあふき

あつゝの夜の夜の

あつゝの夜

なつゝの夜をくくたりあふき

くは家路ありきくくんを

あつゝの月をきく玉海の百も園くきくくく

あつゝのすくくあつゝの夜

あつゝの夜をくくたりあふき

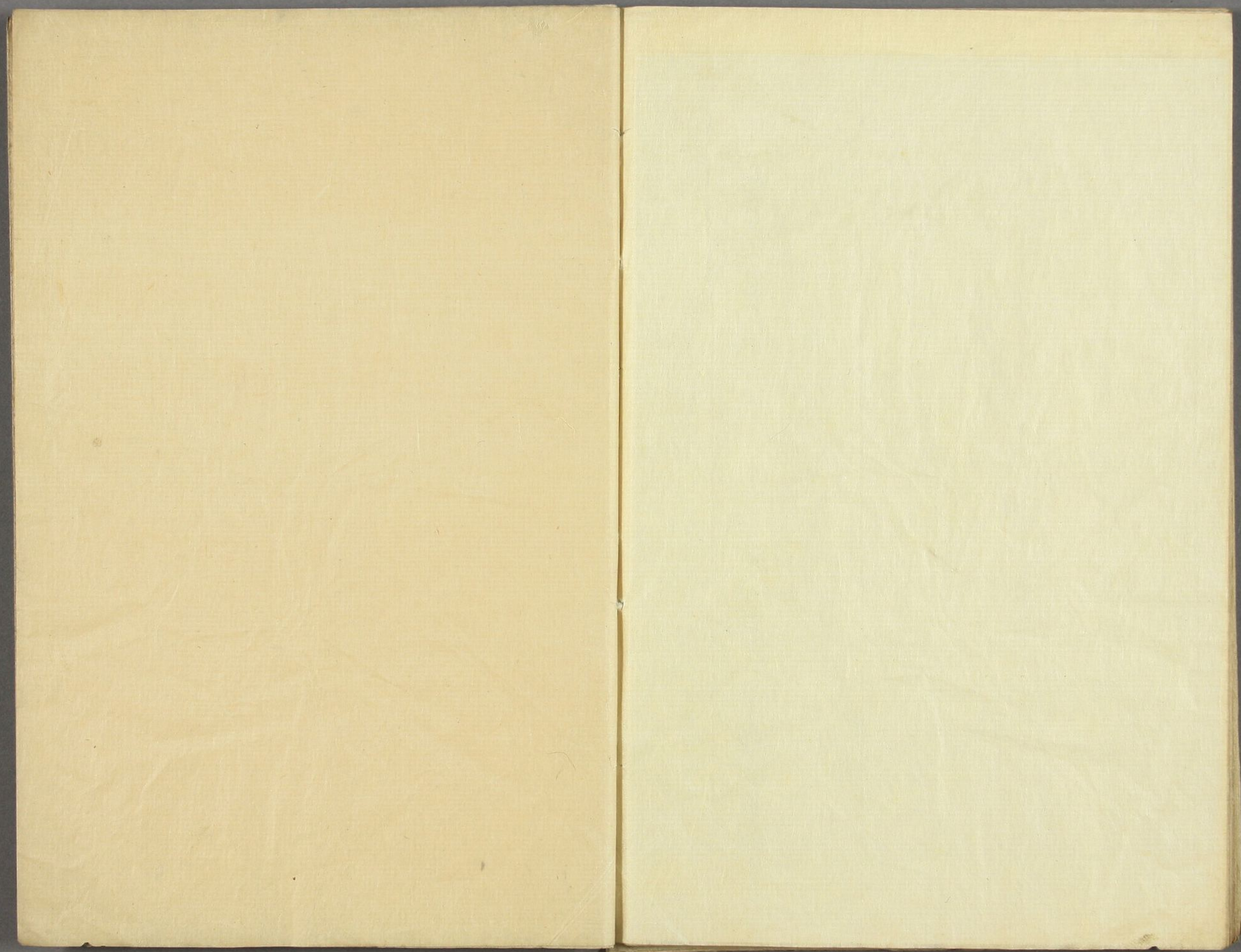
あつゝの夜をくくたりあふき

あ

ゆき草のふゆがさくくまのいひの
月夜子と花のいふ見れぬ
くはのやに立ゆくとまきよまたいつれをさし
いふらふくしたと昔のえ時よりなほ
なほらとせしいてても月をろ
こよひのえくぬふりけをなほ
枕とくきは一炊の多きはありぬ
なほら成んくゆくの夢をさ
すまにせしそうつたりぬ

安政二年春

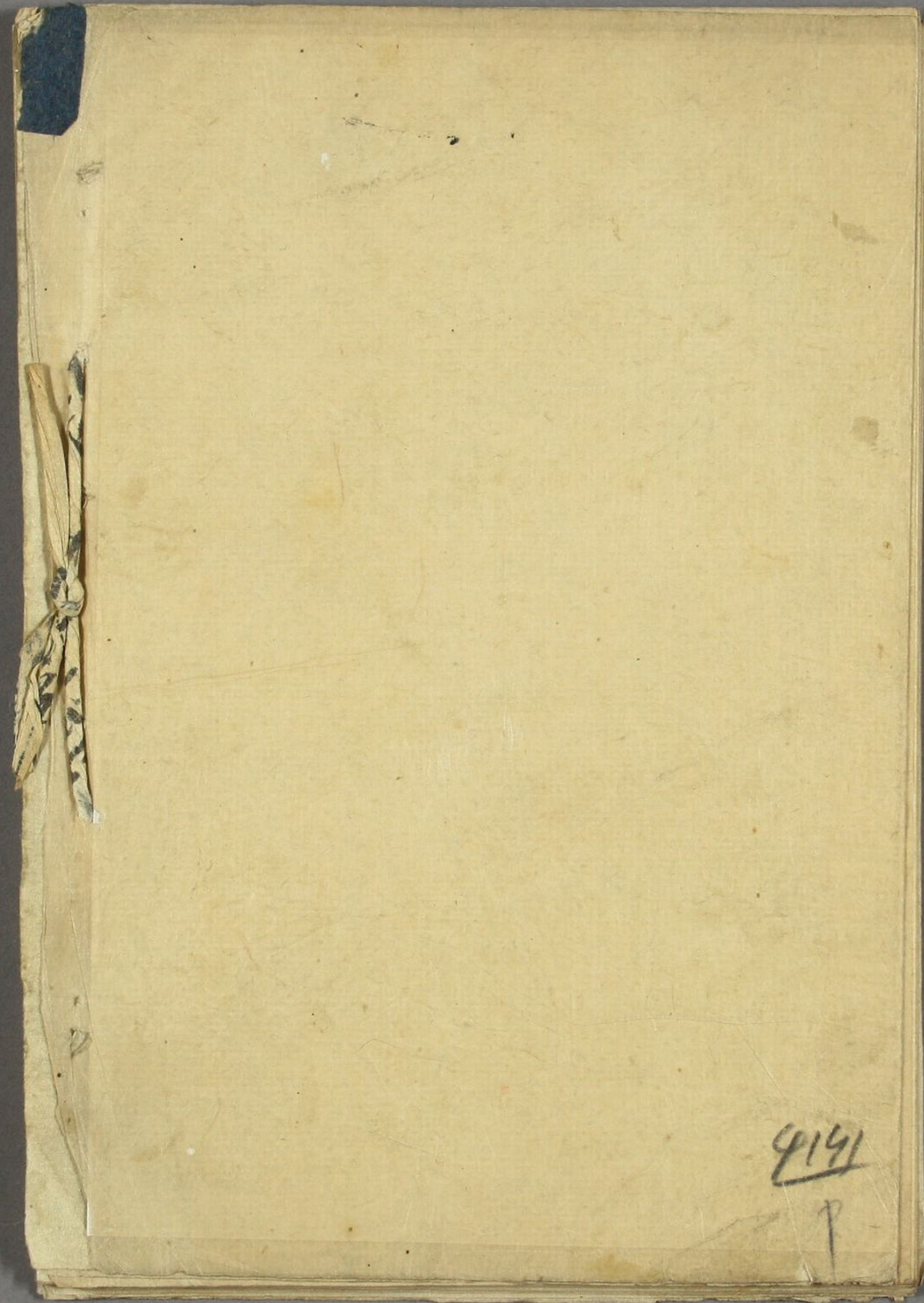
夢人小杜自書







112
Handwritten text on a small white label in the top left corner of the left page.



9191

P